かまくら春秋12月号令和4年12月1日発行

鎌倉・湘南 The Kamakura Shunju

2022

かまくら春秋 12

No.632

連載
「私の少年少女時代」
古川洽次

対談
「ジャポニズムをめぐる話」
平松礼二×伊藤玄二郎

連載エッセイ
三木 卓
横田南嶺 前田万葉
堀江重郎
小倉和夫
稲垣美晴
竜崎 蒼
永井路子
横山隆一
沢 寿郎

連載漫画
二階堂正宏
太田治子
小島 啓
佐々木涼子
堀口すみれ子
山口道孝ほか
金澤泰子
近藤誠一
原田 寛
森 千春

定価360円
(本体327円＋税)

湘南いい店ガイド付

月刊
かまくら春秋
2022年
12月号
No. 632

目次

○表紙版画　高橋幸子　○題字　殿村藍田
○目次挿画　マツオアキコ

〈連載〉
花から読み解く文学「太田治子と桜」　森千春 …… 一
風のあしおと「ユズ坊」　堀口すみれ子　画・山口幸子 …… 六
鎌倉その日その日「政治という技術」　三木卓 …… 八

【対談】
「ジャポニズムをめぐる話」
平松礼二×伊藤玄二郎（本誌） …… 一二

【連載】
「私の少年少女時代」
古川洽次　「母への鎮魂歌『二度目の生は学校の井戸底から』」
画・飯野和好 …… 二四

【特別連載】
「再び『私のかまくら道』」最終回
永井路子　「鎌倉幕府の光と陰 XI」 …… 三〇
「大衆酒場」〈再録〉
横山隆一　「盛り付け画家」 …… 六九

【短期連載】
「かまくらむかしばなし」〈再録〉
沢寿郎　「子供を呑んだえんまさま」　画・平嘉門 …… 八二

〈連載〉
心をたがやす「仏典の言葉」　横田南嶺
「聖書の言葉」　前田万葉　画・吉野晃希男 …… 二〇
…… 二二

二階から目薬「池袋ワンダーランド」　堀江重郎　画・吉野晃希男 …… 三六
地球の本棚「スマホを捨てたい子どもたち」野生に学ぶ「未知の時代」の生き方
山極寿一著　近藤誠一 …… 四〇
鎌倉今昔女語り
「四人目の鎌倉殿～北条政子・後編～」　竜崎　蒼　画・後藤俊太郎 …… 四四
湘南の名画から紡ぐストーリー
「羊の朝」　マッケンジー・ソープ《新たなる夜明け》から　太田治子 …… 五〇
鎌倉と折々の花「錦に染まる寺社境内」　原田　寛 …… 五二
こころにひかる物語「光の季節と闇の季節」　稲垣美晴　画・景山　健 …… 五八
服装の森羅万象「『政治』をまとう衣服（その九）」　小倉和夫 …… 六二
鵠沼物語「東洋の偉大なキリスト者」　山口道孝 …… 六六
無茶四のクールな鎌倉時代　最終回「新田義貞」　二階堂正宏 …… 七二
父母の肖像「聞いておきたかったこと」杉森久英（下）佐々木涼子 …… 七四
共に生きる「堂々たる三十七歳のダウン症者」　金澤泰子 …… 七八
今様・鎌倉ポンチ絵　二階堂正宏 …… 八五
暮らしの法律相談　小島　啓 …… 八六
鎌倉の埋蔵文化財「宇津宮辻子幕府跡」 …… 一〇八
タウンスポット
建長寺ブロンズ模型プロジェクト …… 三五
朗読会だより
宮澤賢治の作品を聞く　建長寺親と子の土曜朗読会 …… 四九
逸品のある風景 284
「鴨汁せいろ～以志橋」 …… 五七
今月の書架 …… 八七
カマク・ラタン …… 八八
かまくら春秋会 湘南の名店ガイド …… 九〇
かまくら春秋会名店地図 …… 一〇〇
表紙のことば　高橋幸子 …… 一〇五
編集後記 …… 一〇五

連載　父母の肖像(四〇六)　杉森久英(下)

聞いておきたかったこと

佐々木涼子

数年前、父が生まれた石川県七尾市で思い出を話すよう求められ、父の長年の友達づきあいについて話したことがある。学生時代からの友人だった篠原梵さんとか深田久弥さんなどのことだったが、多少とも文学関係の人にしぼったつもりだった。

ところがその数ヶ月後、主催関係の機関誌に、もっと杉森久英の文学に踏み込んだ話が聞きたかった、という感想が載せられた。たぶん私がフランス文学の研究者の末端にいるせいで、それに近い内容を期待されたのかもしれない。

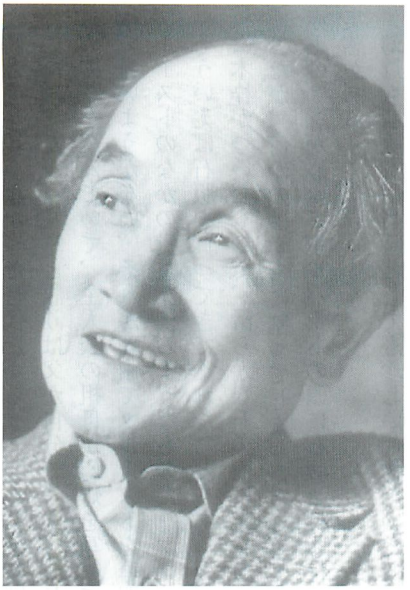
その時にしみじみ思ったのだが、父と私の関係はどこまでも親と子の関係であって、物書きと研究者のそれではまったくなかった。そればかりでなく、私は父の文学を見ることを意識的に除外してきたようでもある。そのことに改めて気づかされた、それは私にとってちょっと意味のある出来事だった。

子の私が思っていたのは、そしていまも年を経るごとに思いを強くしているのは、筆一本でよ

く育ててくれたということ。しかしこれはあまり他人様に言うようなことではない。なので言わないようにしているのだが、それでもつい漏らしてしまう本音である。

父の文学について語るのはなぜか照れくさく難しいのだが、私のなかの文学と父ということだったら、大切な思い出が幾つかある。

小学校に入るか入らないかという年頃、夕食後のひととき、父は毎晩本を読んでくれた。父と私はクジラの親子のように並んで畳に腹ばいになり、四歳下の弟が父の背中に乗る。今日は何を読むかい、と父が聞き、私と弟が、灰だらけ姫とか、ルンペルシュチルツヒェン！とタイトルを叫ぶ。読んでくれる本は数冊あったが、私たちが一番気に入っていたのは楠山正雄編著『グリム童話名作集　森の小人』で、シンデレラを灰だらけと訳すような独特の文体が好ましく、その後も私が背表紙も取れるほど愛読し、今でも宝物である。



ユーモアをたたえた作品にも力量を発揮した杉森久英

それから少し経った頃、父は幻灯機を買ってきて子ども向けの物語を映写した。手元の可動式の枠を左右に動かしながら次々にフィルムを入れ、それを数メール離れた壁面に映し出す。ちょうど明かりの紙芝居といった感じである。幻灯をやる夜は近所の子どもたちも集まってきて、襖や壁際の書棚に写るぼやけた映像と、父が語る物語に夢中になった。

映画もテレビもなかった時代だから、こどもには特別のイベントだった。ストーリーは絵についていたはずだが、文章と語りは父が自分で考え、演じていた。後にプルーストの『失われた時を求めて』を読んでいて、主人公の祖母が幻灯を写してくれる箇所に出会った時の懐かしさはことばで言いようがない。それが理由でプルーストを専門にしたわけではないけれど、私にとってはプルーストのなかの貴重な楔のようなものだ。

そういえば石版を買ってきてくれたこともあった。ノートパソコンくらいの大きさの薄い石の板に木枠がついたもので、滑らかな石の面に字を書いては消すおもちゃである。これもずいぶん使ったが、何かのはずみに割ってしまった。けっこう重いのだけど、薄い石は壊れやすいのだ。赤毛のアンが怒ってギルバートの頭に石版を打ち付け、割ってしまう箇所に、私は格別の身体的実感がある。

幻灯も石版も、当時としても珍しい代物だったと思う。それをどんなきっかけで、何を考えて買い求めてきたのか、父に聞いてみたい気がするけれど、一度も聞かずに終わってしまった。こどもの私はそれが至極ふつうのことで、至極ふつうの親だと思っていた。

父が原稿を書く姿は、その机の前の廊下と庭が私たちの遊びの空間だったからよく覚えているけれども、出来上がった紙面や本を読むことはなかった。読めとも言われなかったし、成長してから頁を繰っても、そこから父の肉声が聞こえるみたいで、面白くも何ともなかった。

しかし父の死から十五年後に母も亡くなり、父関係の雑務を私が引き継ぐと、父について書いたり話したりすることが多くなった。勢い著書も読むようになって、はじめて父の作品を外から見る目を持った。

読んでみて思うのは、じつに読みやすい文章だということだ。自分でも文章にはこだわると言っ

ていたが、これほど筋目が真っ直ぐで、しかもこれほど読みやすいというのは驚きである。おそらくは編集者だった時代に多くの人の原稿を読み、人に読ませる文章について考えた結果かと思う。

また評伝を書く上で主人公を過大にも過小にも評価しないところが、私は気に入っている。日常でも、子どもたちが状況に軽々しく流されたり熱狂したりすると、苦々しい顔で文句を言っていた。

私自身は父の伝記ものより家庭や学校を題材にしたユーモア小説のほうが好きなのだが、それもたぶん父が家で上機嫌でいた時を思い出すせいかもしれないから、客観的な評価かどうか、いまいち自信がない。もっとも本人も、自分の本領は伝記ではなくユーモア小説だと言っていた。

と、ここまで書いてきて、なにやらひどく機嫌の良い、理想的な好人物だったみたいで、書いた私もアレッと首をかしげてしまう。たしかにいつも家にいて、よく家族相手にしゃべっていたが、始終機嫌がよかったわけでもない。それどころか、つまらないことでよく怒るので、食事時など、ついつい顔色をうかがったものだ。すると、今日はみんな黙っているな、なにか僕に腹を立てているのか、などと言う。めんどくさい人なのだ。

いつだったか私に、先々僕の思い出を書くことがあったら、よく怒ったとは書くなよ、と言っていた。でも書いてしまう。よく怒っていたけれど、良い父親だった。もちろん感謝しているが、そう言われて嬉しそうな顔をする人でもなかった。

（杉森久英長女・仏文学者、舞踊評論家）

すぎもり・ひさひで　小説家。一九一二・三・二三～九七・一・二〇。石川県七尾市生。旧制中学の国語教師などを勤め、戦後、河出書房「文藝」編集長に。『猿』（芥川賞候補）を発表後、同社を退社。同郷の小説家島田清次郎の伝記小説『天才と狂人の間』で直木賞を受賞したのち『啄木の悲しき生涯』『近衛文麿』（毎日出版文化賞）等、伝記小説を著した。他に『回遊魚』『天皇の料理番』『能登』（平林たい子文学賞）など。菊池寛賞。日本ペンクラブ副会長。東京帝大卒。